

常仙寺の寅葉餅

原田 弘

和田一丁目の田村法寺道を東へ坂を上った右側に、「寅葉餅」と石碑が建てられている。正権には曹洞宗石雲山常仙寺であるが珍しいことにお寺の向きは北面である。

明治四十一年物明から移ってきたものでこの裏の長徳寺と関係してある。参考までに杉並区内の北寺の敷を見るから八十二分寺で、その内でも和田市から移転して来たのが三十八であるが宗派別でも曹洞宗は二十と数も少ない。

江戸時代から常仙寺というより寅葉餅と言われて人々に親しまれてきたであろう。



この寅葉餅の名の起りを明治二十年代に発行された「東京名所図会・藤町区二編」を参照すると元は「藤

町九丁目藤町西側十五番地」と書かれています。

さて寅葉餅の由来に立ち戻りますがこの寺を聞いた洋書神祕がまだ出家前のこと三種風雲山の巻で語られておりました。彼は驚いて驚くにあつたお堂に逃げ込んできましたが猫はお堂の周りにから入りません。困っていると一頭の虎が現れて頭を追い払い彼の危難を救ってくれました。寅葉餅の化身と信じ神恩のため出家し江戸に於て常仙寺を建立し三河國から東海如來像を捧持し本願にしたと同寺の由來・縁起にあります。



が、先の東京名所図会には、出家前の当時安田某といわれた時、大東寅葉餅を信仰し毎日お詣りを欠かさなかつた、或る時目が現れたが虎によつて奇蹟を説し、その夜夢の中に老僧が現れ「極心深いお前の功德で

縁起から救つてやったのだ」という意味の言葉が読むると思ふが食べました、それから安田は出家し名を洋若存吉と称し大いに信仰に勤んだとのこと。

毎月八と十二日を休日とし境内は人で賑わい盛々有名になったそうです。



「虎は千里行つて、千里還る」といふ、災除けの縁起ゆゑです。お寺の正門を入りを側に小さいお堂の中に木造の虎が安置されています。一見してききさうい。

